

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

AA 研共共課題「身体性の人類学：もの人類学的研究（4）」

2024 年度第 1 回研究会（通算第 5 回目）

日時：2024 年 7 月 7 日（日）13:00–20:00

場所：306

13:00–14:30 染谷昌義（北海道大学）

「無神経な生物たちの心のはたらき?心と身体性をめぐる論争から学べること」

14:40–16:10 岩瀬裕子（東京都立大学）

「『集合的身体』とともに生きる技術ーカタルーニャの『人間の塔』を事例に」

16:20–17:50 金子守恵（京都大学）

「エチオピア西南部における生活道路の建設と道具・身体」

18:00–20:00

情報交換会

**概要：**2024 年 7 月 7 日（日）に 2024 年度第 1 回の研究会を実施した。

当日は上記のプログラムに沿って染谷昌義氏、岩瀬裕子氏、金子守恵氏によるそれぞれ上記表題の通りの研究報告と参加者全員による質疑応答が実施された。なお、各自の報告の概要は以下の通りである。

**報告 1：「無神経な生物たちの心のはたらき?心と身体性をめぐる論争から学べること」**染谷

**昌義(北海道大学/AA 研共同研究員)**

2005 年、イタリアはフレンツェにて、植物神経生物学会（The Society for Plant Neurobiology）という学会が旗揚げされ、最初の国際シンポジウムが開催された。植物は解剖学的な組織としての神経系（神経細胞）をそもそももっていない。にもかかわらず、この学会の発起人たちは植物においても維管束細胞群には細胞の脱分極によって活動電位を伝達する神経様の過程があり、それが植物の適応的な環境応答行動を支える基盤の一つであることを強調した。この学会発足以降、感覚知覚・運動制御・学習・記憶・同種異種生物コミュニケーションなど、植物の心のはたらき（認知）や行動の研究が活発に行われるようになった。そしてそれとともに、これまで表立って語られることのなかった「無神経な生物」

(細菌・藻類・菌類・変形菌・原生動物・植物)たちの心のはたらきや意識についての議論(ほぼ論争)が巻き起こった。心のはたらきを考える上で固くガードされていた神経戦線が突破されたと言ってよいだろう。

本発表では、こうした転回の一部を植物神経生物学の論争を中心に報告する。この議論・論争は、哲学者たちをも巻き込み、身体性や心のはたらきの本性を見直し、それらの多様性を認める議論へと展開しつつある。個別には、1)植物神経生物学会発足の宣言とそれに対する批判と応答、2)植物やその他の無神経な生物の心のはたらきをめぐって心の本性的見直し哲学者たちの意見、3)近年の植物神経生物学会内外の論争話題として、南米チリに生息する木性ツル植物 *Boquila trifoliolata* が葉面の「眼」を使って見ることで支持植物の葉を模倣するという仮説を紹介する。

発表の最後に、人間とは身体性が異なる生物(異身体生物)、そして一般的にはワタシ以外の他者(同種の他者)について理解し認識することへの哲学的困難を緩和する考え方を提示する。異身体生物や、ヒトであっても身体性が異なるヒト(性・年齢・履歴・ハンディキャップの違い、ワタシ以外、サヘラントロプス・チャデンシスやホモ・ネアンデルターレンシスなど)の一人称的な理解には、自身の身体を生きている当事者以外には理解不可能な「主観的性格」があると考えられてきた。哲学では、このような主観的性格は <what it is like to be X (Xであるようなこと)、<how it is for X oneself to be that X (X自身にとって当のXであるようなこと)>と表現され、たとえば What is it like to be a bat? 「コウモリであることはどのようなことか」(Nagel, 1974) という言い方で問われてきた。主観性理解の困難を緩和し、What is it like to be a plant? (植物であることはどのようなことか?)、How is it to be a plant for that plant itself? (植物であることとは植物自身にとってどのようなことか) の理解と知へと通じる道を模索してみたい。

発表者の考えでは、そもそも他者についての知や理解の本質は、ヒトの身体性を保ちながら、植物やコウモリの行動・食性・生息環境・社会性・生態を調査観察(生態参与観察)し、植物やコウモリの生をいわばマネして植物やコウモリのフリをしてみる点にある。そうした身体知の行使は、ヒトの身体性とワタシのパースペクティブがズレていく過程に他ならない。植物やコウモリ、そして他者であるようなことを知り理解するには、逆説的だが、ヒトであることをやめて植物やコウモリへと、あるいはワタシをやめて他者自身へと、文字通り成り変わってしまったら「できない」。一人称的(first person perspective)と三人称的(third person perspective)とを峻別し、背反する両者の知と理解の二者択一を迫る知識論こそ、他者認識の事実とそぐわない偏った見方ではないだろうか。

Nagel, Thomas. (1974) "What is it like to be a bat?", *The Philosophical Review*, vol. 83, no. 4, 435-450. in Nagel, T. (2012) *Mortal Questions*, Cambridge: Cambridge University Press. 165-180. (永井均(訳)「コウモリであるとはどのようなことか」、『コウモリであるとはどのようなことか』、勁草書房、1989年、258-282頁)。

## 報告2：「流動的な『力』との共創経験からの一考察——スペイン・カタルーニャの『人間の塔』を事例に」岩瀬裕子(東京都立大学/AA 研共同研究員)

本報告は、流動的な「力」との共創経験がいかなる身体感覚をもたらし、共生の地平を切り開いているのかについて、発表者のオートエスノグラフィーを交えて考察したものである。

調査対象は、スペイン・カタルーニャ州の祭りなどで230年以上続く民俗芸能の「人間の塔 (Castells)」である。「人間の塔」は、社会の最下層に位置した人々によって始められたとされるもので、大勢の人々が密着して強固な土台を形成し、その中央で人が人の肩の上に上り下りすることで造られるものである。最高で10段、11メートルを超える。

現在、「人間の塔」の継承集団を束ねるコーディネーターには102のグループが登録されており、それぞれの集団はお揃いの色の公式シャツに白いパンツと黒の腰巻を着用し、1年のうち9～10か月ちかくの間、週に2～3回のリハーサルを重ねながら年に20～40回の祭事などへ出掛けて塔造りをしている。発表者はそのうち1791年を創立年とし、最も伝統があるとされるコリャ・ベリャ・ダルス・チケッツ・ダ・バイス (以下、ベリャ) において、2011年よりともに塔造りをしながら参与観察をしている。

危険を伴う塔造りにおいて、その鍵を握るとされるのが最下部である。最下部は落下の際のクッションの役目を担うといわれており、とりわけその核に位置する人々は強烈な圧力と重力にさらされる。生理学的知見から指摘されているように、人体はどんなに止まろうとしても止まれない。起伏のある集合的な身体に身を置くと、その揺れにしたがって個の身体が塔に吸収されるような感覚になったり、逆に、塔の重さを一手に引き受けているような個の身体が強調されるような感覚に陥ったりする。非常に流動的で、かつ、運にも似た捉えどころのない身体感覚が特徴である。

本発表では、こうした力学的・物理学的実践が実践者にもたらす圧力や重量にとどまらず、その実践が要請してくる多元的で異なる複数の要素・条件を「力」として、それらの総和として立ち現れてくる身体を「習合的身体 (syncretic body)」として紹介した。なぜなら、「人間の塔」は自由な参加によってその時々集まった力によって建てられるもので、たとえ、美辞麗句を並べて協力しても落ちる時には落ちる非常に即物的で、かつ何が起こるか分からない祈りにも似たつかみどころのない集合的な身体実践だからである。それを、メンバーの一人は切ってみないと分からないという意味での「メロンのようだ」と語る。

発表者の調査では、アンケート参加者(243名)の74%がベリャ内に家族や親族がいる、もしくは過去にいたと回答した。ベリャにおいては「人間の塔」の歴史で伝わるように、依然として血縁と地縁を主なつながりをしており、塔造りがカトリックの教会暦に埋め込まれた大祭で続くことから、たとえ、日頃の関係性が希薄になっても、大きな塔造りの前には

そうした「伝統的な」つながりをたよりに人々のつながりが呼び戻されていく。さらにこの塔造りがユニークなのは、各々が持つ身体の類似性と異質性をもとに日頃の社会関係がシャッフルされていくことである。なぜなら、「人間の塔」造りには、それぞれのポジションにふさわしいとされる背格好が伝わっており、たとえ、あるメンバーが日頃の社会関係をもとに塔造りにやってきても、その人が持つ身体の類似性——たとえば、身長や腕の長さなどポジションごとに望ましい背格好——をもとに塔内に配置され、それまで知り合いでなかった人と人とを出会わせていく。と同時に、塔造りには身体の異質性も欠かすことができない。たとえば、塔を高い位置で支えるために腕の長い人、あるいは、塔の隙間を埋めるための小柄の人など、塔の水平を保つための力学的・物理的実践には集まってきた人々がそもそも持つ物質としての身体があってこそその塔造りであり、その都度、いま、ここにいる人々の身体の類似性と異質性を組み合わせることで、その時々望ましが立ち上がっていくからである。

本発表では、こうした力学的・物理的実践が要請してくる様相を焦点化した。その後の質疑応答において、調査者自身によるオートエスノグラフィーの可能性や言語化への難しさ、あるいは実際のグループの指揮系統や塔造りの起源、実践者の塔造りに対するモチベーションなどについて議論が展開された。現在、塔造りと社会関係がいかなる関係性にあるのかについて住み込み調査を継続しており、今後、場を改めて報告したい。

### 報告3：「土器づくりのテクノ・ライフヒストリーと身体性：年長女性職人に注目して」

金子守恵（京都大学/AA 研共同研究員）

本発表では、エチオピア西南部にて土器を製作するアリの女性職能集団を対象にして、彼女たちの技術習得の過程をライフステージにそって描きだすことを目指す。彼女たちの「身体性」を考察する際に、土器を成形する「手」と職人たちが自らの半生を土器製作と関連づけて語ることに注目して、技術の習得過程を分析検討する。それらをふまえたうえで、土器製作をめぐる「身体性」が基盤となって、年長の女性職人が、自分が暮らしやすいような生活の仕方を創りだしている状況を提示する。本発表の元になる調査は、1998年11月～2002年3月までに集中的に行なった調査と、その後2023年8月に至るまでに断続的に行なった。この発表では、6つの村に暮らす女性職人60人の土器製作にかんする観察データ、職人20人の半生の聞き取りデータ、そのなかでも年長女性6人の半生に注目した。

検討と分析の結果、次の3点を指摘した。1) 土器の成形を始める6歳頃から結婚前までの未婚女性のステージ（アンザ）において、未婚の職人は同じ形態の土器を、小さなサイズから大きなサイズへと習得をすすめており、その過程で母は娘に対して、「(母と娘の)手が

ちがう」という説明の仕方、その成形の過程を手取り足取り教えることはしなかった。2) ライフイベント（結婚や出産）により女性は妻（マ）や母（インディ）というステージに移行する。妻や母として、さらには世帯の生計を担うなど、社会経済的な役割を期待されていた。このステージに移行すると、それぞれの職人の「手のよさ」を知った客が、継続的に特定の職人から土器を購入することが多くなり、これとともに職人が成形する土器種には一定の傾向性があらわれていた。3) 孫ができると祖母（アキン）とよばれるようになる。このステージに移行した女性職人の中には、夫と死別後に再婚するものもいたし、親族、なかでも男性親族（息子、兄弟、甥など）と共存・連帯しながら、一人で生きていく生活を実現するものもいた。そのなかには、土地を保有して、自分の家を建てるような職人もいた。「手がちがう」という表現を基盤にした考え方は、年長女性が自らが暮らしやすい生活を創り出すことに作用している可能性が示唆された。

（以上終わり。）